東方映炎羅

火渡 勇裡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方映炎羅

【Ｎコード】
Ｎ６５７７Ｘ

【作者名】
火渡　勇裡

【あらすじ】

「あら…！お久しぶりです。良い一生でしたか？」

地獄に来た魂と対面する時、映姫様は決まってこう言うんだ。それに対する死者達の答えもいつも同じ。

「はじめまして」

どちらが間違っているわけじゃない。映姫様にとっては久しぶりで、彼らにとってははじめましてなんだ。彼らには今世の記憶しか無く、映姫様は彼らを前世、或いはもっとずっと前から知っているのだから。彼らに罪はなくその事に何の理不尽もない…ないが…彼らの初めましてを聞く度に映姫様のお顔にちらつく悲しげな表情が、僕には、たまらなく、いたたまれないのだ。

忘れてしまえば良いのに、仕事と割り切ってしまえば楽になれるだろうに、あの方にはそれが出来ない。優しすぎるから。他人の事を思いすぎるから。

そんな映姫様が、僕は大好きで…そんな映姫様だからこそ、僕はいつも笑顔でいて欲しくて…そんな映姫様を、僕はいつまでも守り続けたいと、そう思うんだ…。

これは小さな物語だ。とるに足りないこの僕の、全存在をかけた、小さな願いの物語。大切な人の笑顔の為に全てを捧げた…しかし後悔はない…あるわけ…ない。

閻魔様の憂鬱

「あら…！お久しぶりです。良い一生でしたか？」

地獄に来た魂と対面する時、映姫様は決まってこう言うんだ。それに対する死者達の答えもいつも同じ。

「はじめまして」

どちらが間違っているわけじゃない。映姫様にとっては久しぶりで、彼らにとってははじめましてなんだ。彼らには今世の記憶しか無く、映姫様は彼らを前世、或いはもっとずっと前から知っているのだから。彼らに罪はなくその事に何の理不尽もない…ないが…彼らの初めましてを聞く度に映姫様のお顔にちらつく悲しげな表情が、僕には、たまらなく、いたたまれないのだ。

忘れてしまえば良いのに、仕事と割り切ってしまえば楽になれるだろうに、あの方にはそれが出来ない。優しすぎるから。他人の事を思いすぎるから。

そんな映姫様が、僕は大好きで…そんな映姫様だからこそ、僕はいつも笑顔でいて欲しくて…そんな映姫様を、僕はいつまでも守り続けたいと、そう思うんだ…。

これは小さな物語だ。とるに足りないこの僕の、全存在をかけた、小さな願いの物語。大切な人の笑顔の為に全てを捧げた…しかし後悔はない…あるわけ…ない。

鬼と死神

透んだ空気に抜けるような青く高い空。辺り一面に燃えるように咲く彼岸花を揺らす風が少し肌寒く感じる秋の訪れ。僕は数少ない友人と話す為に三途の川のほとりに来ている。

「というわけで映姫様を元気付けるために何かしてあげたいんだけど」

彼女の顔色を窺いながら僕は話しかけた。

「ふぅん…上司のためにそこまでしようなんざ殊勝な心掛けだね。で、それをどうしてあたいに言うんだい」

実に不機嫌そうな声が返ってきた。現在僕の目の前で苦虫を十匹まとめて噛み潰したような面をしている少女の名は小野塚小町。死神であり、地獄で浮いた存在である僕の数少ない友人の一人だ。幻想郷に来てすぐに映姫様と出会い、奇妙な縁からずっと小姓としてお側において頂いている僕はまだまだ皆から認められているとは言い難く時には嫌がらせを受けたりもしているが、そんな中で僕の経歴や周囲の目を気にせず自然体で接してくれるとても気さくな女の子だ。

今は何故かえらく機嫌が悪い様だけれど…。

「だってこまっちゃんが一番映姫様と仲がいいじゃない。何かアドバイスしてよ」

「知ったこっちゃないね！あたいはあくまでもただの死神で四季様は閻魔様さ。それ以上でも以下でもないよ。」

そっぽを向いてしまった。こんなに子供っぽく憤慨している様が珍しくて少し吹き出しそうになったが何とかこらえる。
別に言い争いがしたい訳ではないのだ。むしろそんなのは御免だ。喧嘩になったら手元にある大鎌をブンブン振り回して襲いかかってくるんだから。本気で斬りかかってくる訳じゃないから避けられないこともないけどそういう時たいがい僕は激しいアクションで激しく揺れる彼女のおっぱいに視線が釘付けになっているのでかなりギリギリの攻防になるのだ。いや、普通だよね？年頃の男子なら…。

「だいたい映姫様のあれは昔からさ。閻魔様のくせに死者を迎える度に傷ついて…繊細過ぎるんだよあの方は…」

「あ、やっぱりこまっちゃんも心配してたんだ」

「べっ…別にそんなんじゃないさ…とにかくあたいは面倒なのはゴメンだよ！やるならあんた一人でやるんだね」

どうやら何がなんでも協力する気はないらしい。何でこんなにむきになるんだろう。
こまっちゃんも映姫様の事を心配してるくせにね。

とにもかくにもとりつく島も無い以上、余計な事を言って逆鱗に触れる前に立ち去るのが賢明だろう。

「へぇ…まぁいいけどね…なら自分で考えるよ。お昼寝の邪魔しちゃってごめんね」

「イヤミかい！？」

怒鳴るこまっちゃんを残して僕は立ち去る。ついつい余計な事を言ってしまった。怒らせずに別れるつもりだったのだが、全く悪い癖だ。
まぁさっぱりした性格の彼女のことだ。次に会う時には忘れてるだろう…たぶん…きっと。
　それにしても彼女も彼女だ。どうして心にも無いことを言うのかな？彼女が映姫様のこと大好きなのはわかりきってるのにね。

……少年の姿が見えなくなった頃、小野塚小町は一人呟いた。
「やっと行ったか、まったく…。なんだいあたいが目の前に居るのに映姫様映姫様ってさ…！そりゃあいつが四季様の事を好きなのはわかってるけど…少しはあたいの事も見てくれたってさ…」
小さな声は誰に届くこともなく風に消えていった…。

　さてはて弱ったな。こまっちゃんの協力が得られない以上、映姫様を元気付けるアイデアは自分で捻り出すしかない。まぁ元よりそのつもりだったけど。ただ参考に出来る意見が欲しかったのだ。それも叶わなかったけどね。
アイデアを捻り出すといっても一人で悶々と悩んでいたってろくなことにならない。前にこまっちゃんの誕生日を祝おうと一人で一週間考え込んだ挙げ句奇妙な顔だけの妖精のぬいぐるみをプレゼントしてすごく微妙な顔をされたのだ。確かゆっくりって言ったかな？まぁとにかく同じ轍は踏みたくない。ちょうど明日は休日だし、人里にでも出向いてみようか。何か面白い発見があるかもしれない。

さて、明日の予定もきまったところでそろそろ自己紹介の一つもしておこうか。誰に？そんなことは訊いちゃいけない。
僕の名前は鬼羅。名前の通り鬼の血を引いているらしい。らしいというのはつまり正確な事は知らないということだ。僕には幻想郷にくるまでの記憶がない。だから頭に生えた二本の角だけが僕が鬼で

ある証だ。まぁ鬼と言っても「鬼の四天王」とか「地上最強の生物」とか言われる様な大したもんじゃない。こまっちゃんと取っ組み合いの喧嘩をして泣かされたこともあるくらいの軟弱者であるところの僕が本当に鬼なのかは怪しいところなのだが映姫様がそういったのだから間違いは無いのだ。あの人は全てお見通しなのだから。

浄玻璃の鏡…それで見たものを僕には教えてくれなかったけれど、きっとそれは知るべきではないことなのだと思う。ここに来る前のことなんて僕自信興味もない…しかし、一つだけ…一つだけ感じていることは…大切な、とても大切な人がいた気がする…その淡いわだかまりだけが僕の中でずっと燻っていた。

鬼と吸血鬼（前書き）

続いちゃいました！

鬼と吸血鬼

こまっちゃんと話した翌日、僕は早朝から人里を訪れていた。
ひんやりとした空気が肌に心地よい。今の住処を気に入ってはいるが、大自然の中で朝の空気を肺に取り込む快感は地上ならではの魅力だ。
うん…実に気分がいい。早朝すぎてまだ誰も起き出していないなんて事は全然気にならないね。うん。無駄な時間だなんてこれっぽっちも思ってないからねホント。
しかしどうしたものかな…農作業に従事する人々もまだ起き出していない訳で…当然お店やらが開いて里が賑わうまでにはまだまだ時間がかかる訳で…。
グダグダ考えながら歩いていると、向こうから二つの人影が歩いてくるのが見えた。いや、この表現は正確じゃない。何故ならそのうちの一つ、小さい方の影には蝙蝠の様な大きな翼があり、明らかに人ならざる者だったからだ。
僕は近付き、話しかけることにした。暇潰しだろうと言われれば何の反論も出来ないが、普段話さない相手と会話をするのも案外アイデアの種になるものだ。

「おはようございます。レミリアさんに咲夜さん。奇遇ですね」

「誰よアンタ？」

レミリアさんから手厳しいカウンターが来た…。宴会やらで何度か会ってる筈なんだけどな…案外頭の中は年相応にボケているのかもしれない。

「痛っ！」

ドスッと、手刀が僕の脇腹に食い込んだ。

「今何か失礼なこと考えてたでしょ」

…流石というかやはり侮れない人だ。

「お嬢様。この方は確か半年くらい前に閻魔様の所に来た小姓ですよ。うちの宴会にも何度かいらしてますわ」

「あらそう。影が薄いから忘れてたわ」

「失礼ですよ。そんな本当の事を言っては」

顔見知りに話しかけただけでこの仕打ち。僕は僕が可哀想だった。

「ところで何の用なのよ？この私に図々しく挨拶なんかした以上、何の用も無いとは言わせないわよ？」

「無視して通り過ぎたっていちゃもん付けるくせに」

「咲夜！アンタは黙ってなさい！」

どうやら本当に面倒臭い人に絡まれてしまったようだ。暇だったとはいえこれはうっとうしいな…適当にごまかすか。

「失礼しました。レミリアさんがあまりにお美しいのでつい声を

おかけしてしまいました」

精一杯の笑顔で歯の浮く様な台詞を吐いてみた。

「うわ…」

「うちのお嬢様に近寄らないでくれません？」

凄い目で見られた…視線が痛い。

「アンタなに？ロリコンなの？」

「あの闇魔様にベッタリということはその可能性は大いにありますよねぇ…」

あらぬ誤解をかけられてしまった。っていうかロリとか自分で言うんだ…５００歳のくせに。

ズドム！

「ぐはっ！？」

今度はグーで殴られた。吸血鬼の腕力が容赦なく鳩尾に食い込む。

「また失礼な事考えてたでしょ」

本当に勘の鋭い人だ…。

「お嬢様、あまりいじめては可哀想ですわ」

咲夜さんが止めに入ってくれた。意外と優しい人なのかもしれない。

笑いをこらえてるようにも見えるけどきっと気のせいだな、うん。

「ふん！これくらいで大袈裟に痛がっちゃって。ホント貧弱ね、人間って」

「いや、僕は…」

「お嬢様、この方は人間じゃありませんわ。確か鬼だったはずです。ほら、角もありますし」

「はぁ？鬼？こんな貧弱貧弱ウリリリィが？ってか角なのアレ？カチューシャかと思ったわ」

あんまりだった。僕そろそろ泣いてもいいよね？

「ま、丁度いいわ。寝起きの悪い巫女に追い出されてムシャクシャしてたとこよ。あんたちょっと私に付き合いなさい！」

「付き合えって僕には映姫様が…！」

「何勘違いしてんのよこのペド野郎！弾幕ごっこに決まってるでしょ！」

「ああ…そういうことですか…弾幕ごっこね。お断りします」

「なっ…！あたしの言うことが聞けないっての？嫌だってんなら本気で殺してやってもいいのよ？」

すぐむきになるところは見た目相応だ。こういうの好きなひとはたまらないだろうね。もちろん僕はロリコンじゃないから何とも思わ

ないけど。

「おおこわいこわい…というか僕出来ないんですよ、弾幕。何で皆エネルギー弾撃ったり無限にナイフが出てきたりするのか不思議なくらいで」

「何あんた…弾幕も張れないの？かっこわる…」

「本当にさらりと酷いこと言いますね…」

「つまんないわねー。そうだ！あんたを人質にして闇魔を釣ろうかしら！あんたと違って少しは楽しめるわよねきっと」

「…前言は撤回します…。貴女が映姫様に手を出すと言うのなら、貴女は僕の敵だ。お相手しますよ。弾幕なんかじゃなくこの手で…！」

「へぇ…やるんだ、私と。あんたみたいな出来損ないが？まさか勝てるなんて思ってないわよね？」

レミリアさんの纏う空気が一変した。今までの無邪気な少女から、百戦錬磨の吸血鬼の表情へと一瞬で切り替わった。どうやらまずいスイッチを押してしまったらしい。しかし今さら引き下がる事は出来ないし、もちろんそのつもりもない。たとえ冗談だろうと映姫様に仇為そうというのなら、僕は容赦するつもりはない。

「貴女じゃ僕には勝てませんよ…何ならこの右手一本で貴女を倒して見せましょうか？」

「言ってくれるじゃない…！今すぐ後悔させてあげるわ！」

こうして非力な鬼と最強の吸血鬼の戦いの火蓋は切って落とされた。

鬼と吸血鬼（後書き）

次回はバトルかも！

鬼と合気

高位の悪魔としてのプライドか精神の幼さ故か、はたまたその両方か…レミリアさんは簡単に挑発に乗ってくれた。自信に満ちた足取りでで迷いなく距離を詰めてくる。

「お嬢様、闇雲に近寄るのは危険です！何か作戦があるのかも知れません！」

咲夜さんが至極全うな忠告をした。しかしここで止まるレミリアさんじゃあ勿論ない。

「心配は無用よ咲夜。あんたはそこで主人の勇姿を見てなさい！」

レミリアさんは堂々と僕の目の前に立ち、そして…僕の右手を掴んだ。

「捕まえた…♪こんな貧相な腕で何が出来るってのよ？簡単にへし折れるわよこんなもん…！」

レミリアさんが左手に力を込める。吸血鬼の握力。僕の右手がミシリと音を立て、そしてー

「残念ながら…捕まったのは貴女だ…！」

べしゃり、とレミリアさんの矮躯が崩れ落ちた。糸の切れたマリオネットの様に突然に、そして力なく。

「なっ…！？かっ…体が…！動かな…！」

必死で動こうとしている感触が腕に伝わってくる。しかし動かない。僕より遥かに強い力を持っているはずの少女が、どうあがいても決して立ち上がる事すら出来はしない。そういう風に、力を込めている。

「お嬢様！？」

「なんで…っ！私が…！こんな奴に！」

「どうしました？レミリアさん。いきなり座りこんじゃって。さっきまでの威勢はどこへ逝ったんでしょうね？」

「この…っ！」

「貴方！私のお嬢様を放しなさい！」

咲夜さんがこちらに歩み寄る。しかしレミリアさんのプライドはそれをよしとしなかった。

「咲夜！手出しは無用よ！」

「しかし…！」

「良いから大人しくしてなさい！メイドに助けられたりしたら『紅い悪魔』の名折れだわ…！」

「ご立派ですねレミリアさん。でも…このまま日傘をどけてやれば灰になっちゃいますけどね…」

「っ…！この…外道が…！」

「貴女が悪いんですよ？貴女は踏み込んではならない領域に踏み込んだ。貴女の運命は…ここで終わりです」

僕はレミリアさんの肩にかかっていた日傘を弾き飛ばした。

彼女の白磁の肌が朝日にさらされ、そして―

鬼と悪魔（前書き）

ちょっと長め。お嬢様戦が終わらない…

鬼と悪魔

太陽…その眩しく暖かい光で時に優しく時に激しく大地を包み込む存在…。人間の生み出した多くの文花や宗教において神と見なされ、古代から崇め畏れられてきた大いなる恵みの星。何物にも縛られず平等に全てを照らすその光は今、小さな吸血鬼の体を容赦なく照らしていた…。

「あぁっ！うぁあああ！！！ぁは…ぁ……」

耳をつんざく悲鳴はやがて弱々しい呻きに変わり、もはや目の焦点も定まっていない。レミリアさんの手から力が抜け、髪から肌から薄い煙が立ち上る。

終わった…と思った。日傘は遠くに落ち空には雲一つ無い。僕の勝ちだ…と、ここで気を抜いたのが、命取りだった。

一瞬の隙をついてレミリアさんは僕の腕を振り払い自由の身になった。しかしもう日陰に逃げ込むだけの力もないだろう…そう思った矢先、突然陽光が遮られ辺りが暗くなった。

「！？…何だ…！？」

僕は咄嗟に空を見上げた。そして目にしたものは―

「あれは…竜！？」

この幻想郷で最も強い力を持つといわれる神獣の姿がそこにあった。突如現れた竜はその巨体で周囲に降り注ぐ陽光を遮る。

「どうしてこんな時に…！こんな偶然――いや…そうか…そういうことか！」

僕は竜を睨んでいた視線を再び前方に向ける。そこには日光による損傷から完全に回復し、既に拾い上げた日傘の下で不敵に微笑むレミリアさんの顔があった。

「千載一遇のチャンスを逃したわね…♪まさか、もう許してもらえるなんて思ってないわよね？」

妖しくも美しい笑みの中で紅い眼が凄まじい怒気を放っている。

そうか…『運命を操る程度の能力』…そういうことなのだ…。レミリアさんと戦うということは、ありとあらゆる運の要素を全て敵に回すということなのだ…。ただ通りすがる程度のこととはいえ、竜の運命すら味方につける程とは…。彼女には戦う前から勝利の女神が微笑んでいる…！

「なんてことだ…！あの強さでこの勝負運…厄介なんてものじゃないな…」

「伊達に５００年も生きちゃいないわよ。ところであんた…面白い能力を持ってるわね。この私が動くことすら出来ないなんて、いったい何をしたのかしら？」

「僕は能力なんて持ってませんよ。これは歴とした技術です。合気と言いましてね、敵の力を利用する格闘技です」

「あー…。うちで門番やってる格闘バカに聞いたことあるわ。日本で生まれた奇妙な格闘技ね。実戦で使えた者は歴史上に数えるほどしかいないって言うけど？」

「その通りですよ。こっちに来てからその中の一人に教わりましてね」

「なるほど、そういやあんたは地獄に住んでるんだったわね。死者と交流があってもおかしくないか」

「ご明察…」

僕に合気道を教えてくれたのは小さな老人だった。普通の人間でありながらその技は摩訶不思議で、鬼の血を引く僕の力が全く通用しなかった。映姫様の力になりたかった僕は、天国へ逝くはずだった彼に無理を言って三ヶ月間みっちりとその技を叩き込んでもらったのだ。

幸い僕は筋が良かったらしく、三ヶ月でその達人と互角に戦えるレベルにまで上達出来た。基礎体力の差もあったのだろうが。

そういうわけで幻想郷の中で低級と言わざるを得ない僕の力でもレミリアさんを組伏せることが出来たのだ。もちろんそれは肉弾戦なら、の話だが…。

「殴り合いはまずそうね…じゃあこういうのはどうかしら？」

レミリアさんは右手を高く掲げた。今まで感じたことのない凄まじい魔力が右手のひらの上に集中する。それは紅い光となり、細長く延びて、やがて禍々しい魔力の槍を形作った。

「神槍…スピア・ザ・グングニル！」

放たれた槍はまさに神速と呼ぶべき速さで一直線に僕をめがけて飛んでくる。

飛び道具…確かに接近戦しかない僕を確実に仕留めるには最善の策だろう。誰でも思い付く。しかし、それで簡単に破られるような技なら、最初から学んだりはしない！

「シャアッ！！」

気合一閃、僕はグングニルの槍先を受け、逸らし、回し、真っ直ぐに元来た方向へ跳ね返した。

「んなッ！！？」

レミリアさんの表情が凍りつく。まさか跳ね返されるとは思っていなかったのだろう。棒立ちで避けることさえ忘れている。グングニルはそのままのスピードで突き進む。レミリアさんの小さな心臓に向かって…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6577x/

東方映炎羅

2011年11月22日01時58分発行